

『何もわかっていない?』 ヨハネ11:45-57

11:45 マリヤのところに来て、イエスのなさったことを見た多くのユダヤ人たちは、イエスを信じた。

11:46 しかし、そのうちの数人がパリサイ人たちのところに行って、イエスのされたことを告げた。

11:47 そこで、祭司長たちとパリサイ人たちとは、議会を召集して言った、「この人が多くのしるしを行っているのに、お互は何をしているのだ。」

11:48 もしこのままにしておけば、みんなが彼を信じるようになるだろう。そのうえ、ローマ人がやってきて、わたしたちの土地も人民も奪ってしまうであろう」。

11:49 彼らのうちのひとりで、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った、「あなたがたは、何もわかっていないし、

11:50 ひとりの人が人民に代って死んで、全国民が滅びないようになるのがわたしたちにとって得だということを、考えてもいない」。

11:51 このことは彼が自分から言ったのではない。彼はこの年の大祭司であったので、預言をして、イエスが国民のために、

11:52 ただ国民のためだけではなく、また散在している神の子らを一つに集めるために、死ぬことになっていると、言ったのである。

11:53 彼らはこの日からイエスを殺そうと相談した。

11:54 そのためイエスは、もはや公然とユダヤ人の間を歩かないで、そこを出て、荒野に近い地方のエフライムという町に行かれ、そこに弟子たちと一緒に滞在しておられた。

11:55 さて、ユダヤ人の過越の祭が近づいたので、多くの人々は身をきよめるために、祭の前に、地方からエルサレムへ上った。

11:56 人々はイエスを捜し求め、宮の庭に立って互に言った、「あなたがたはどう思うか。イエスはこの祭にこないのだろうか」。

11:57 祭司長たちとパリサイ人たちとは、イエスを捕えようとして、そのいどころを知っている者があれば申し出よ、という指令を出していた。

●序論

この聖書で強調されるのは、ただイエスさまを救い主と信じることで受ける救いです。

-1:12-13 …すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。それらの人は、血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生れたのである。

-3:18 彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。

ただ信じるだけでいい。それで人は、それに何か目に見えるわざやしるしを加えようとしますが、それはすなわち神さまがくださる救いを台無しにしてしまいます。

エペソ2:8-9 あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである。

1コリント 1:23-25 しかしわたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える。このキリストは、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものであるが、召された者自身にとっては、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の力、神の知恵たるキリストなのである。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからである。

だからはっきりわかること。それは実にシンプルな応答でOKだということ。ただイエスさまを信じればよいということです。それが最も霊的な応答とも言えます。

一方で信じない人は、実に様々に知恵を働かせ、策略が練られていく様子がわかります。今日お読みしている所はまさにそういう箇所です。

●本論

I. そこに誠実な祈りが見えてこない

今日、ユダヤ人たちはこのラザロの出来事を受けとめきれずに、いや反発して、主イエスを殺そうと決意を固めていった様子わかります。

その前に、案に語られていないがゆえに目を向けるべき一つのことを取り上げます。

それが彼らのその集いの中で、誠実な祈りの姿が見えない…ということです。

この会議でも祈りはあったかと思えます。けれども神さまが中心にされていない、その御心を誠実に求める祈りが見えない。そしてこんな言葉が漏れてきていました。。

11:48 もしこのままにしておけば、みんなが彼(イエス)を信じるようになるだろう。

彼らの関心は、自分たちの求心力の低下への恐れであったのです。

どんな人生経験や知識も…。また聖書知識やふるまいも、そこで神さまが中心でなければそれは、独りよがりのパフォーマンスになってしまいます。

へりくだって、主よわたしたちのこの集いに、あなたが共にいてください、あなたの知恵と導きをください。わたしたちはあなたに聴きたいのです。…そういう祈りがそこにある、見えていることは大切だと思わずにはいられません。

そう、祈りから遠ざかっていないか。神さまを遠くに置いていないか…と。

II. そこに損得判断が語られる

それはすなわち、彼らを誠実な祈りから遠ざけた思いであったことがうかがえます。

11:47 そこで、祭司長たちとパリサイ人たちとは、議会を召集して言った、「この人が多くのしるしを行っているのに、お互は何をしているのだ。」

11:48 もしこのままにしておけば、みんなが彼を信じるようになるだろう。そのうえ、ローマ人がやってきて、わたしたちの土地も人民も奪ってしまうであろう」。

長く彼らは、自分たちの地位と立場のもとで人々からの尊敬を受けていました。しかし、それがイエスさまの登場で一変。人々は、イエスさまに神さまの愛を見るようになっていったからです。

まずそれが彼らには我慢のならないことでした。

さらにもう一つこと。かれらの会議共同体(サンヘドリン)は、ローマから自治を許された政治的な存在でもありました。彼らは一定の自治をゆるされ、その中で神殿礼拝を守ることができ、自分たちの権威や地位も守られ安定していたのです。

しかし、もしイエスと人々の動きが、自分たちのコントロールが効かないような運動になってしまうなら、ローマはすべてを奪い取ってしまう…という想像を膨らませていたのです。

彼らは、そのようになることを恐れしました。メシアを待望していた彼らのはずですが、神を恐れたのではなく、目に見えるローマの力を恐れたのです。恐れに震えるようなありさまがそこにありました。

そんな彼らを落ち着かせたのが、当時の大祭司カヤパでした。

:49-50 彼らのうちのひとりで、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った、「あなたがたは、何もわかっていないし、ひとりの人が人民に代って死んで、全国民が減びないようにするのがわたしたちにとって得だということを、考えてもいない」。

彼が、「わたしたちにとって得だ」という、つまりイエスを殺せばすべて丸く収まり、自分たちにとって得だという方法を提示し、そしてそこにいる人たちは、大変納得したのです。つまりそこでおそらくは多数決の決議がなされました。

「11:53 彼らはこの日からイエスを殺そうと相談した。」とある通りです。

神の御言葉がない、祈りが見えない。そんな風に感じますが、ある意味政治的な打算としては、この世的に正当な答えなのでしょう。

しかしわたしたちは、聖書が語る言葉を思い起こさせられるのです。。

詩篇127:1 主が家を建てられるのでなければ、建てる者の勤労はむなしい。主が町を守られるのでなければ、守る者のさめているのはむなしい。

覚えていてください。もし主の守りを求めるのであれば、祈り始めることが大切です。

Ⅲ. そこに神の知恵が語られる

”イエスへを殺すことを決断する”。それは、エルサレムに訪れるだれもが知るところともなっていたことがわかります。

:54 そのためイエスは、もはや公然とユダヤ人の間を歩かないで、そこを出て、荒野に近い地方のエフライムという町に行かれ、そこに弟子たちと一緒に滞在しておられた。

:57 祭司長たちとパリサイ人たちとは、イエスを捕えようとして、そのいどころを知っている者があれば申し出よ、という指令を出していた。

この福音書の記者ヨハネは、カヤパの言葉に解説を加えてこう言っています。

:51-52 このことは彼が自分から言ったのではない。彼はこの年の大祭司であったので、預言をして、イエスが国民のために、ただ国民のためだけではなく、また散在している神の子らを一つに集めるために、死ぬことになっていると、言ったのである。

もちろんカヤパは、そんな思いをもって語ったつもりはありません。

けれども、神さまは福音的に用いてくださった不思議を語りだしているのです。

そして大切なこと。ここで初めてイエスさまの十字架の死が。「人のための身代わりの死」であるということがあらわされています。

本来、その罪のゆえに死ななければならない人のために、人がその罪で死ぬという定めを、イエスさまが身代わりに引き受けてくださったことが示されているのです。

キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。…私たちが神のみもとに導くためでした。(1ペテロ3:18・新改訳)
神さまは、わたしたちの想像を超えています。

さいごに)

イエスさまがもたらした福音のメッセージはシンプルでした。

「わたしを信じなさい」と重ねて語ります。のちの言葉となりますがイエスさまはこうも語られます。

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。」(14:1)

これはわたしたちにとって、大切なチャレンジです。

今を生きる私たちも、争いがあり、民同士の不信感があり、また神さまに背を向けた多種多様な価値観が重んじられるようになってきているからです。

わたしはそんな中で、御言葉を聞き、祈りつつ歩むことを、皆さんと共にしていきたいのです。これは神さまの御思いに適うことか。祈って聞いた答えか…と。

神さまの導きやなされることは、わたしたちの目に耳にわからないこともあります。

しかしあのカヤパが、全く自分の意思で語ったと思われたその言葉を、神が全くキリストの預言として用いられたことを覚えていきましょう。

周囲から、「あなたがたはわかっていないのか？」と聞くことがあるかもしれません。

それでもなお、わたしはそこで神を尋ね求めていきたいのです。

神は既に、応えてくださっています。時至ってわたしたちはそのことがわかる。それがこの福音書の記者ヨハネの体験でもありました。

その最たるものは、あのイエス・キリストの十字架の出来事です。犯罪人として処刑されたイエスさまを見て、だれが救い主と知ることができていたでしょうか？ まさにわかりませんでした。

けれども、神はこの方の完全な身代わりの犠牲を通して、ただ信じる者を救う福音を完成されたのです。

だから改めて御言葉を共に告白できるのです。

十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。(コリント人への第一の手紙 1章18節)